

水産業のすがた

■ 漁業の概況

本県は、面積で見れば全国43位ですが、海岸線の延長距離が約430kmと長く（全国27位）、黒潮の影響を受けるため、東京・横浜という大都市に近接しながらも相模湾や東京湾は多種多様な魚介類に恵まれています。

三崎漁港を基地として世界の海で主にまき網やはえ縄でかつおやまぐろを漁獲する遠洋漁業、主に伊豆諸島周辺海域でたもすくいや釣りによりさばやきんめだい、むつなどの底魚（そこうお）を漁獲する沖合漁業、定置網、釣、まき網、刺網など、様々な漁法で多種多様な魚介類を漁獲する沿岸漁業、わかめ、のりなどの海藻類を生産する海面養殖業、あゆ、わかさぎ、にじますなどを対象とする内水面漁業・養殖業などが行われており、平成25年の漁業生産量は約35,735トン・漁業生産額は約126億円でした。

かながわ漁業の主要項目（平成25年）

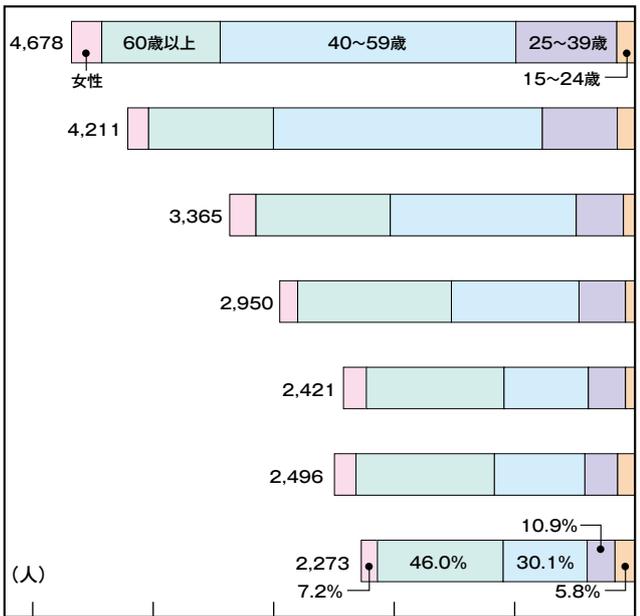
項目	単位	神奈川	全国	全国順位
漁業経営体数	経営体	1,157	94,507	28
漁業就業者数	人	2,273	180,985	28
漁船隻数	隻	2,096	152,998	28
漁業生産量	t	35,735	4,730,155	28
海面漁業	t	34,534	3,733,824	24
海面養殖業	t	1,201	996,331	27
漁業生産額	億円	126	13,537	28
海面漁業	億円	122	9,478	24
海面養殖業	億円	4	4,059	27

経営体数、就業者数及び漁船隻数は「平成25年漁業センサス」、他は「農林水産統計年報」
 (注1) 表の各数値に内水面の値は含まれていない。
 (注2) 四捨五入の関係で、合計が合わないことがある。
 (注3) 神奈川の数値は、国立研究開発法人水産総合研究センター及び県水産技術センターの数値を除いてあるので、実際の年報の数値とは異なる。
 (以下、同)

■ 漁業を支える人々

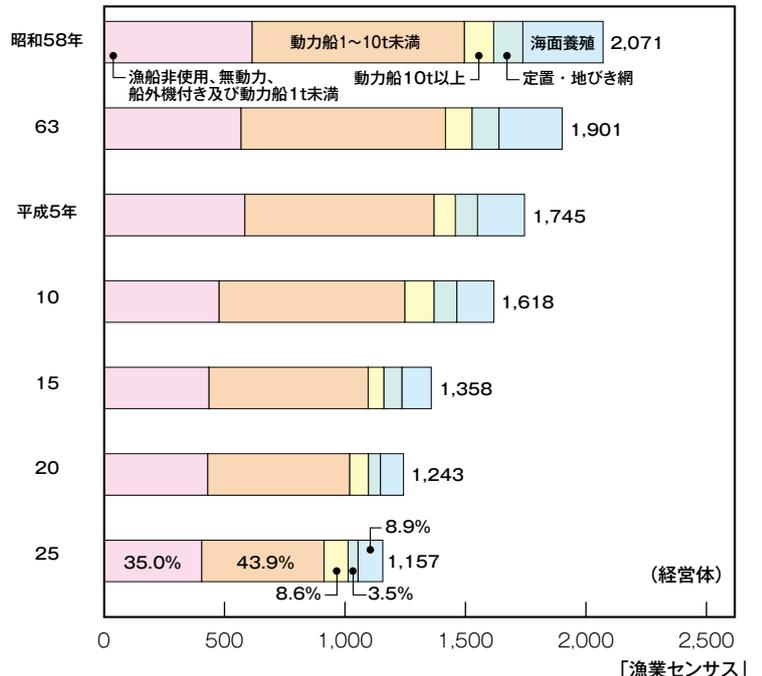
■ 漁業労働力 本県の漁業経営体や漁業就業者の数は、減少傾向が続いています。平成25年の漁業就業者数は2,273人で、そのうち60歳以上が46%を占めています。

漁業就業者数の推移



(注) 就業者数の20年の年齢構成は、15~29歳、30~39歳に変更（以降、変更なし）。

漁業経営体数の推移



「漁業センサス」

漁業を支える漁場、漁港及び漁船

漁場

沿岸漁場

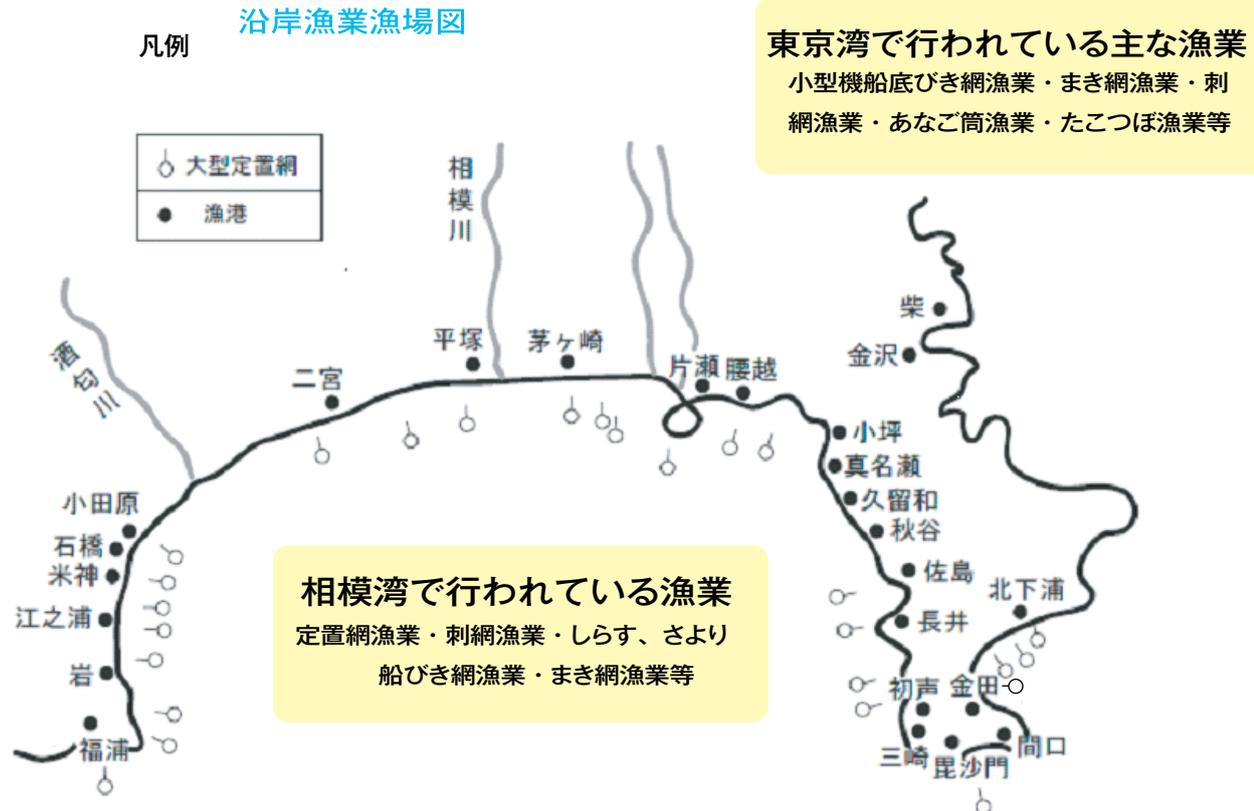
様々な漁業が営まれており、東京湾では、あなご、かれい、しゃこなど内湾性の魚介類が、また相模湾では、あじ、さば、いわしなどの回遊性の魚類が主に漁獲されています。

沖合漁場

伊豆諸島周辺海域を主漁場としてさばやきんめだい、むつなどの底魚を漁獲しています。

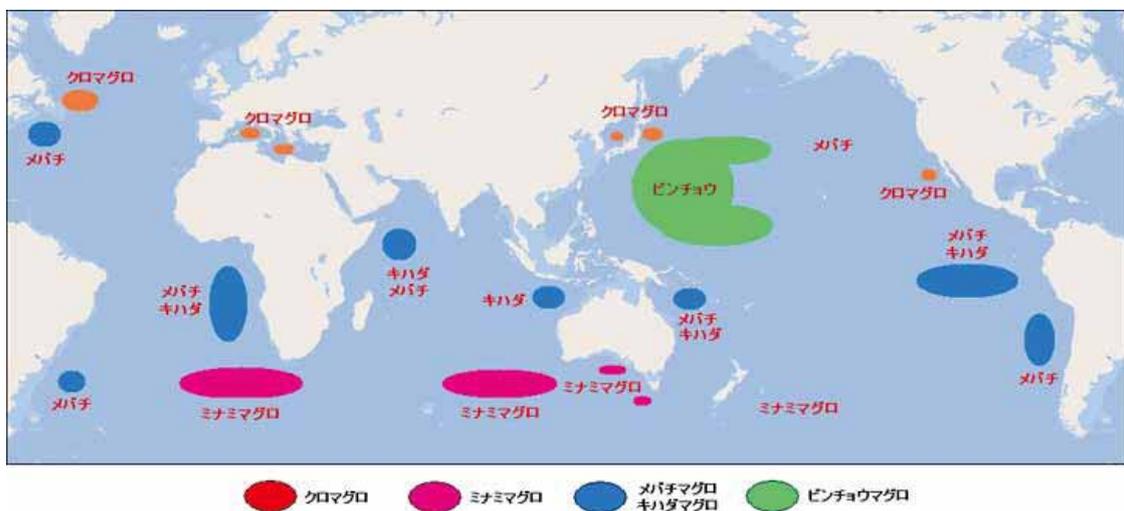
遠洋漁場

遠洋まぐろはえ縄は世界の広い海域を、大中型まき網はインド洋や太平洋を漁場として、まぐろ等を漁獲しています。



主なマグロ漁場図

マグロの中で最高級品とされるクロマグロは北半球の海域に、次いで高級品とされるミナミマグロは南半球の温帯域に多く生息しています。また、メバチマグロ、キハダマグロ、ビンチョウマグロは世界中の海に広く分布しています。



■漁港 県内には第一種漁港から特定第三種漁港まで大小25の漁港があり、漁船の係留や水揚げの場となっています。一番水揚量が多いのは三崎漁港で、平成24年の全県水揚量33,363トンの約54%を占めています。また、川崎港を除く6港湾にも、漁港同様の機能を備えた区域があり、漁業活動に利用されています。

■第一種漁港

利用範囲が地元の漁業を主とするもの

■第二種漁港

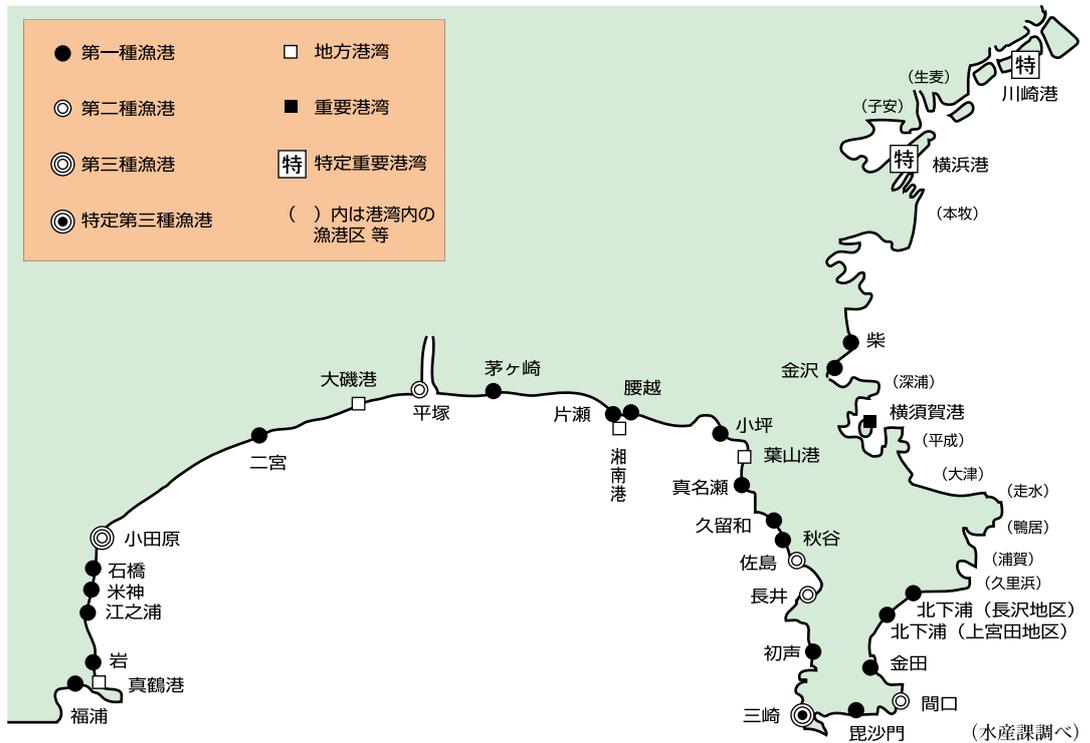
利用範囲が第一種漁港よりも広く、第三種漁港に属さないもの

■第三種漁港

利用範囲が全国的なもの

■特定第三種漁港

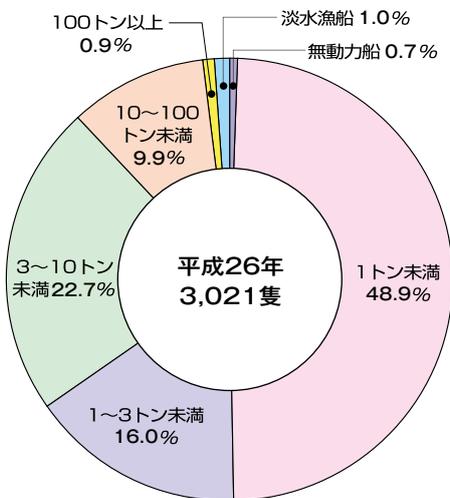
第三種漁港のうち水産産業の振興上特に重要なもの



■漁船登録隻数

本県の平成26年の漁船登録隻数は3,021隻であり、約98%が動力船です。また、登録漁船の約88%が沿岸漁業に従事する10トン未満の小型漁船で占められています。

登録漁船隻数の構成比



(注) 淡水漁船以外は海水漁船
(水産課調べ。平成26年12月末現在)



三崎漁港 (特定第三種漁港)



小田原漁港 (第三種漁港)

■豊かな海の恵み

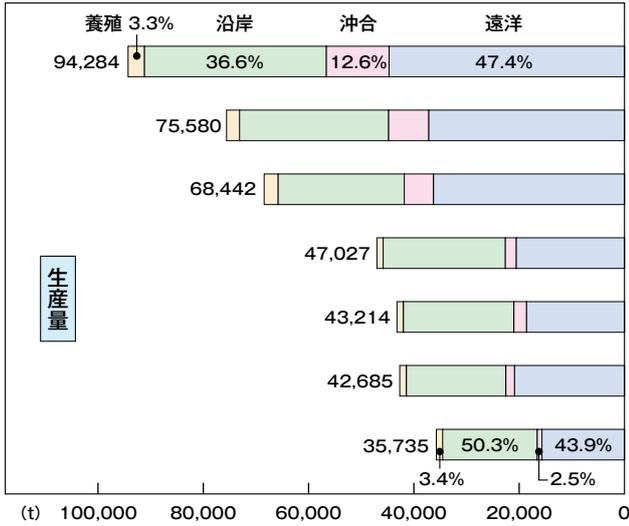
漁業の生産動向

■海面漁業・養殖業の生産量、生産額の推移

平成25年の本県の海面漁業と海面養殖業の生産量は約35,735トンで、定置網などの沿岸漁業が50%、まぐろはえ縄などの遠洋漁業が44%、さばたもすくいなどの沖合漁業が3%、わかめやのりの生産を主とする海面養殖業が3%を占めています。

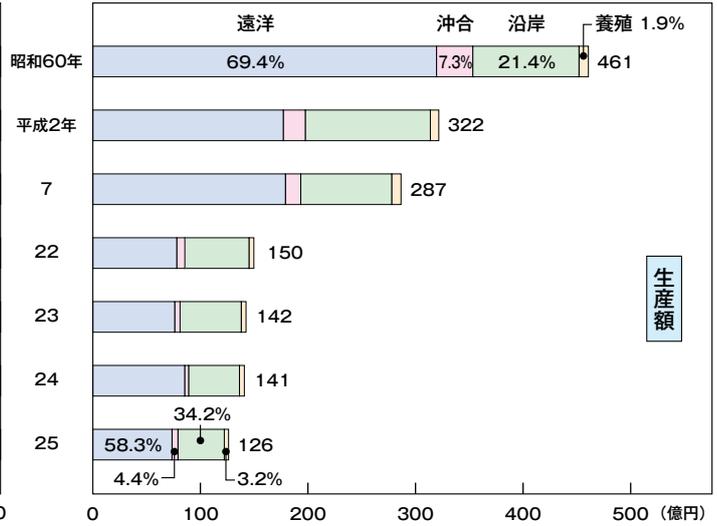
生産額では、約126億円のうち、沿岸漁業が34%、遠洋漁業が58%、沖合漁業が4%、海面養殖業が3%を占めています。

海面漁業・養殖業生産量の推移



(注) 19年以降の沿岸、沖合、遠洋別生産量は未公表のため各業種の操業形態から推定して分類した。

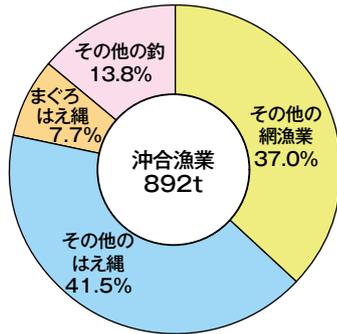
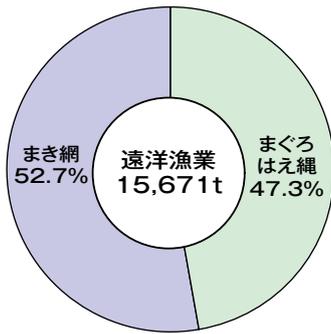
海面漁業・養殖業生産額の推移



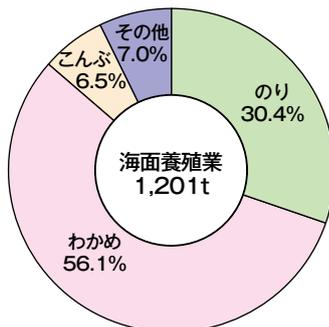
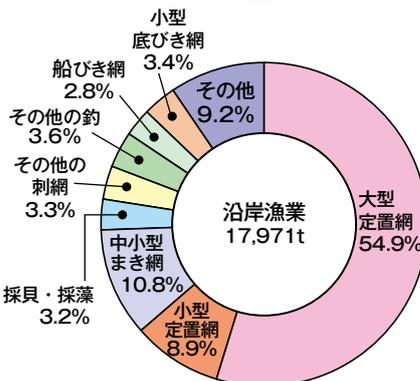
(注) 19年以降の業態別生産額は未公表のため、魚種別生産額をもとに計算した推計値。

「農林水産統計年報」

海面漁業・養殖業の生産量構成比 (平成25年)



まぐろの水揚げ風景 (三浦市)



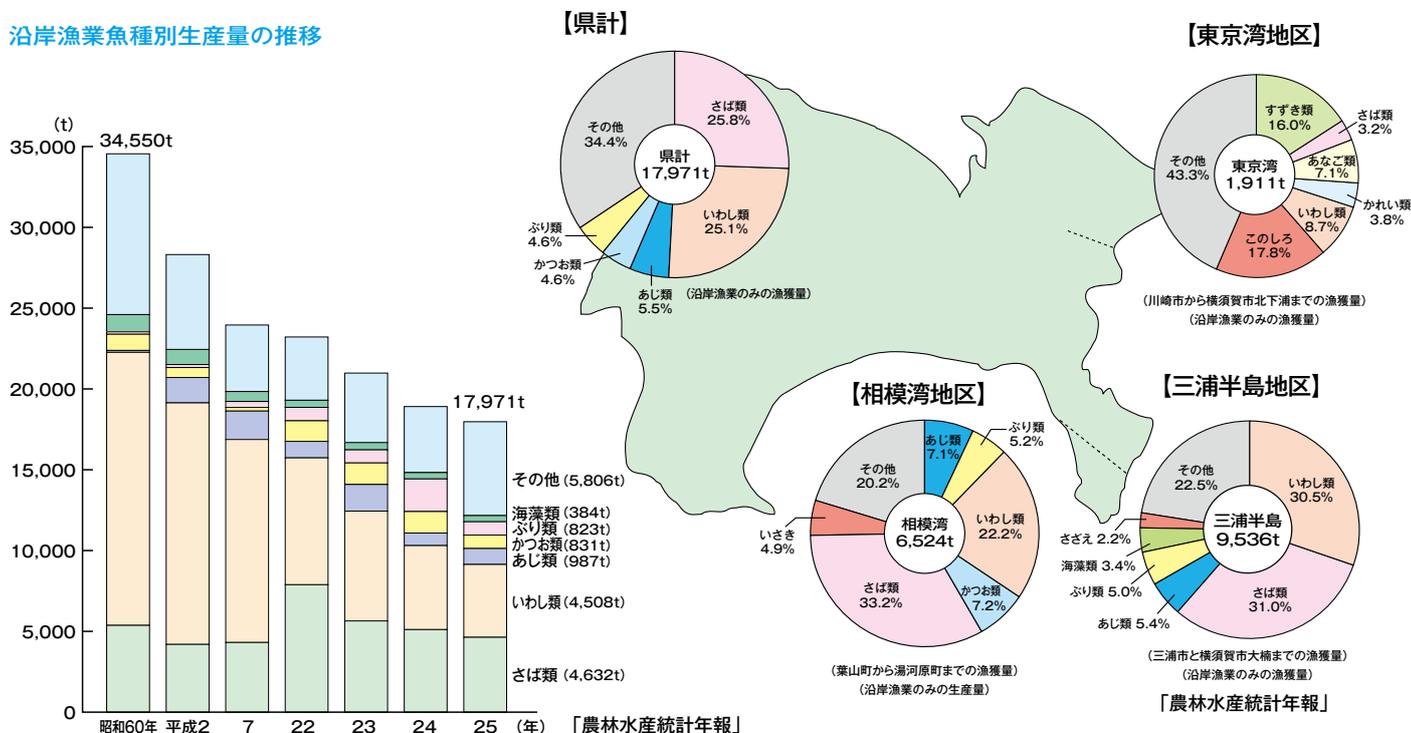
みづき漁業

「農林水産統計年報」(注) のりの生産量は水産課による推計値

■主要魚種別構成

平成25年の沿岸漁業魚種別生産量の第1位は、さば類で4,632トン、次いでいわし類4,508トン、あじ類987トンの順となっています。地区別にみると、東京湾地区は、小型底びき網やまき網などによるこのしろ類、すずき類やあなご類、三浦半島地区は、まき網や定置網によるいわし類、さば類、相模湾地区では、定置網によるいわし類、さば類及びぶり類の漁獲量が多く、地区ごとに特色ある魚種構成となっています。

沿岸漁業魚種別生産量の推移



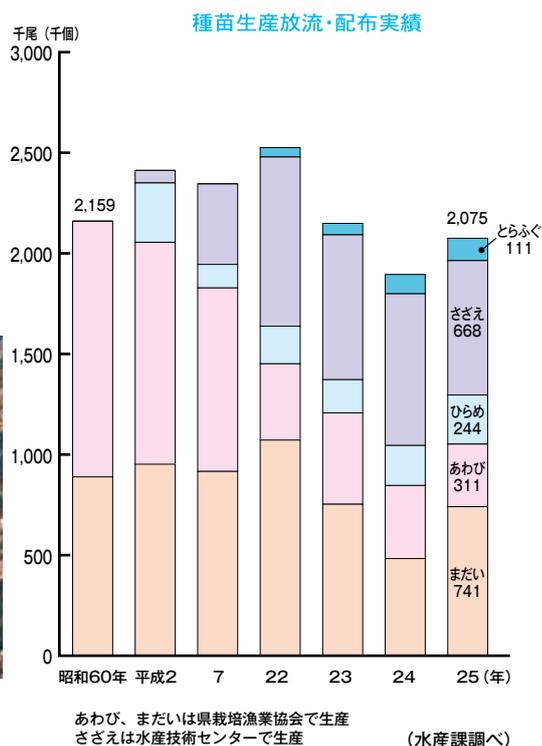
■つくり育てる漁業、守り育てる漁業

栽培漁業、資源管理型漁業

本県では、まだい・ひらめ・とらふぐ・あわび及びさざえなどの人の手によって育てた稚魚等を放流する栽培漁業を進めています。中でも、まだいは漁業者に加えて、広く遊漁者などからの協力金も得て積極的に事業を進めています。さらに、栽培漁業にとどまらず、広く水産資源を持続的に有効利用するため、資源管理型漁業を推進し、漁業者による自主的な取組も積極的に支援しています。



マダイ稚魚、飼育作業 (右はマダイ稚魚: ふ化後100日前後、7~8cm)
(公財) 県栽培漁業協会提供



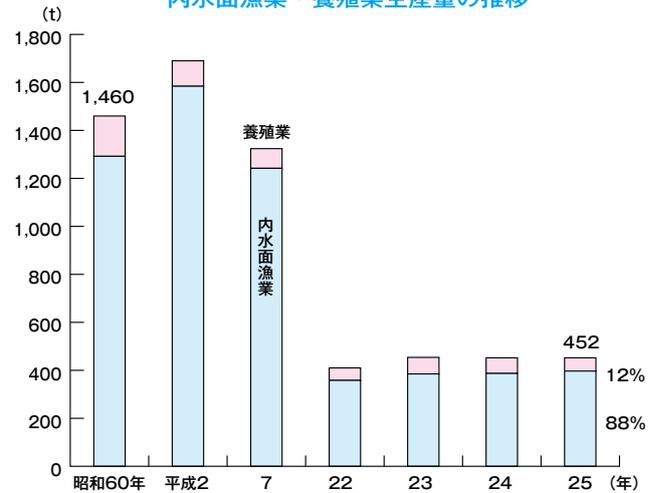
■ 川や湖で行われている淡水魚の採捕や養殖業

内水面漁業・養殖業

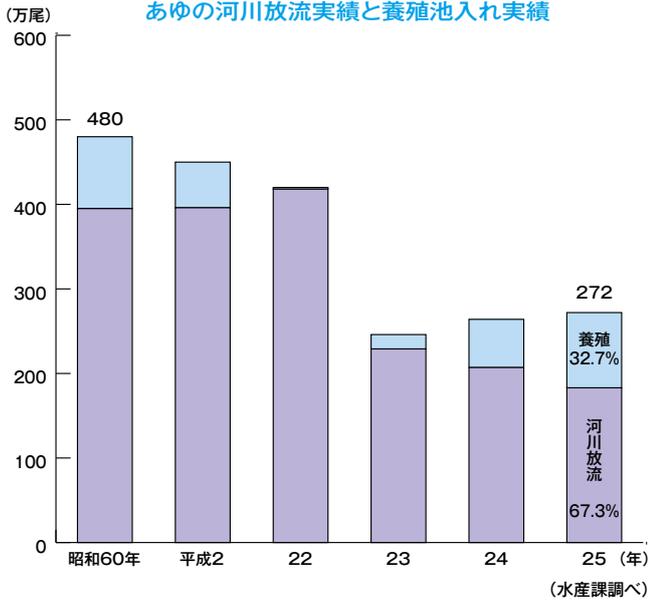
相模川、酒匂川、芦ノ湖などでは、あゆ釣やわかさぎ釣などが行われています。これらの河川・湖沼では、漁業協同組合などが毎年種苗を放流しています。

また、あゆやにじますなどの養殖業も行われています。

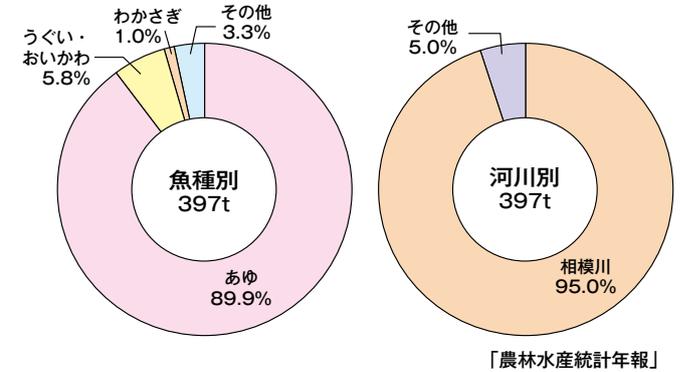
内水面漁業・養殖業生産量の推移



あゆの河川放流実績と養殖池入れ実績



内水面漁業生産量構成比 (平成25年)



■ 恵まれた水産資源を生かした水産加工

平成25年の本県の水産加工業の生産量は44,433トンで、そのうち31%をかまぼこなどのねり製品が占めています。

また、見向きもされなかった海藻のアカモクを水産技術センターが指導し、食品化したアカモク製品が注目を集めています。



アカモク収穫作業



アカモクの加工品 (左：乾物、右：茹で冷凍)

水産加工業の生産量及び経営体数の推移

